

柳田邦男のグリーンフワーク

— 亡父大町弥三郎の霊にささぐり —

大 町 公

はじめに

ノンフィクション作家柳田邦男の作品で、筆者が初めて読んだのは「死の医学」への序章であった。当時、△死▽に関する資料を集め始め、西川喜作「輝やけ我が命の日々よ」を読み、そこから西川と親交のあった柳田の著作へ移ったように思う。まず「死の医学」への序章」を、ついで「ガン50人の勇氣」を、その後、二、三年たって同時代ノンフィクション選集第一巻「生と死」の解説「自分の死を創る時代」を読んだように思う。A・デーケン、日野原重明とともに、柳田からも死を念頭において生きることの大切さを教えられた。

だから、一九九四（平成六）年、「文藝春秋」四月号に、柳田の手記「犠牲 わが息子・脳死の11日（上）」を見つけた時にはびっくりした。柳田の次男洋二郎（敬称略、以下同様）は、九三（平成五）年八月九日、自死をはかった。十一日間の脳死状態を経て、二十日逝去したのである。すぐさま雑誌を買い求め、むさぼり読んだ。「よりに

よって、どうして柳田さんの息子さんが」。それが偽らざる気持ちであった。柳田のプライベートな事柄については、それまで何も知らなかった。

九七（平成九）年十月末、A・デーケンとの共編で「突然の死」とグリーンフワーク」が出版された。筆者は刊行直後に購入し、さっそく柳田の巻頭論文「私の場合、その自己分析」を読んだ。作家柳田邦男は、自らが経験した範囲内で、確実に言えそうなことだけを書いていく。悲しみについて書かれた文章で、これほど感銘を受けたものはない。悲しみを味わい尽くした人の文章である。柳田さんもなんとかグリーンフワークを終えられたのだなど、筆者もホッとするような気がした。今から考えれば、私はその時まで、グリーンフワークというものを十分理解していなかったようだ。

まず、その「私の場合、その自己分析」を検討することから始めよう。

一、患子の自死

一九三三年八月九日、次男洋二郎は自ら命を断とうとした。彼は対人恐怖と強迫神経症を主訴とする心の病を患っていた。発症は中学三年の頃。当初そのことに本人も家族も気づかなかつた。一浪して大学に入つて、ある日突然、自宅二階にある自分の部屋の窓ガラスに、鉄製パーペルを投げつけて壊し、飛び降りようとした。病が一気に表面化する。それから精神科への通院治療が始まる。読書をしたり、日記をつけたり、テレビを見たり、自室で静かに過ごすことも多かつたが、思いつめたり、興奮したりすると、しばしば、窓ガラスに椅子を投げつけたたり、電球をバットで叩き割つたり、置物を壁に叩きつけたりした。「家のなかには、いつ何が起るかわからないという緊張した空気がいつも張りつめていた。」⁹⁾ そういう日々が五年半も続いた。

妻は洋二郎が四歳の時から精神を患っていた。すでに二十年がたっている。洋二郎が発症した頃から、病態は一段と悪化。強い向精神薬と睡眠薬の作用で「朦朧状態」となり、まともな会話が成り立たない。クリニックに通院する時以外は寝ていることが多い。病気は慢性化し、回復の見通しはなかつた。

洋二郎は最初に入った大学を続けられず、二年間休学ののち退学。別の大学通信教育部に入学する。そのカリキュラムも思うようにこなせず、三年目のサマースクーリングの途中に、深夜、自室で自死をはかつたのである。

柳田は十日未明、洋二郎が二階の自室で心肺停止状態にあるのを発

見、救急車で近くの救命センターに運ぶ。幸い心蘇生はしたものの、やがて脳死状態に陥り、十一日目の八月二十日に心停止、逝去。享年二十五歳。柳田五十七歳のことである。その時のことはあとで詳しく述べる。

一 八月末か翌月初めの状態だろう。柳田は次のように回想する。「その後ほとんど深く暗い谷底に落ちたような喪失感と無気力に襲われた。

誰かに会うとか、取材に出かけるとか、原稿を書くとか、何かを積極的にしようとする気力が出てこない。テレビを見る気もしない。世の中のニュースに興味がなくなる。テレビを見ても新聞を見ても、気持ちとそのなかに入つて行かない。画面や活字が目の前を素通りして行くだけ。スーパーや駅の雑踏のなかに入っても、人々の顔や姿が生き生きしたものとしては目に映らない。まるで全体が生命なんかない人形の街のように見える。一種の離人症のような精神状態に陥つてたのだろう。」¹⁰⁾

妻は相談相手にならない。夫婦で支え合うことは不可能であつた。長男賢一郎（敬称略、以下同様）も独立していた。当時、ウィルス脳炎後遺症による発作がまだ時々起こつた。彼も万全の身ではなかつたのである。

この頃のことだろう。身近な人から「あの状況のなかで、よく生きていたね」と言われるそうである。柳田自身も「へああ、人はこういうときに一家心中を考へるのかもしれない」と、何度思つたかわからな

い。」と書いている。

では、柳田はなぜそこまで思いつめることがなかったのか。なにゆえ、自殺するところまでいかなかったのか。柳田の悲しみへの対処の仕方を見る。

二、グリーフワークはどのように行われたのか

柳田のグリーフワークはどのようなものであったか。グリーフワークとは「悲嘆の癒しの作業」である。柳田は自らのグリーフワークの中身を、「私がなぜ自殺も一家心中もしなかったのか」という視点から分析する。まず、自己グリーフワークの条件、つまり「私自身に内在していた状況対応能力とでもいうべきもの」を挙げる。

(1)自己グリーフワークの条件。

柳田があげた条件は次の六つ。柳田のコメントで重要と思われる部分をつけ加えておく。

①少年期における父や次兄との死別体験がプラスにはたらいた。

「家族の誰かが死んでいなくなるということが日常的にあったことは、私の心のなかに、愛する肉親の喪失を人間が遭遇するどうしようもない運命として受容する柔軟さともいうべきものを植えつけたように思う。」

②父や次兄が死んだときの母の姿が、無意識のうちに私の心の持ち方のモデルになった。

「その母の姿は…人生のあらゆる局面で、どんな困難に遭遇しても、精神的安定を保つ基盤のような役目を果たしてきた」。

③少年時代から様々な困難を経験し、自律的な生き方を身につけていたことが、プラスにはたらいた。

「どんなに苦しいときでも自分のことは自分で解決し切り拓いていくんだという生き方が、全身にしみついていった」。

④記者時代や作家になってから、様々な事件や人間の取材をとおして、あまりにも多くの悲惨な例に出会ってきた。

「なんで自分だけがこんな不幸を背負わなければいけないのか」といった「悲劇のヒーロー」意識あるいは「自己憐憫」の感情にひたることがなかった。」

⑤グリーフワークの重要性について知識を持っていたことが、自分での癒しのケア（グリーフケア）をするうえで大きく役立った。

「知らず識らずのうちに、自分がいまどういう状態に置かれていて何をすればよいかという心のはたらきにつながっていった。」

⑥「書く」という行為が、作家としてほとんど体にしみついた習性となっていたことが、渾沌とした内面を整理するうえで決定的に重要なはたらきをした。

「人は、自分の内面にあるものを物語として抽出できたとき、葛藤から解放されることが多い。」

(2)グリーフワークを外から支えた条件。

次に、柳田は自分のグリーンフワークを外部から支えてくれたものを挙げる。

⑦洋二郎が十一日間世話になった救命センターの医師や看護婦が、とてもあつたかかったこと。

「愛する者の死を受容するうえでも、その後のグリーンフワークのためにも、蘇生によって時間が与えられるということの意味は極めて大きいと、私は感じた。」

⑧臓器（腎臓）を提供したことが、グリーンフワークという点からも、私たちに大きな意味を持った。

「犬死を避けられたという思いは、私にとつてのグリーンフワークに大きくプラスにはたらいた。」

⑨洋二郎の友人たちが、あたたかく悼んでくれたこと。

⑩兄弟姉たちの支えがあつたこと。

(3)グリーンフワークは終わらない

論文の最後で、柳田はきわめて重要な指摘をした。「最後に念のため述べておきたいことがある」と断って、こう言ったのである。

「それは、グリーンフワークとは決して悲しみを抹消することを目標にしているものではないということである。私は自己グリーンフワークによつて、生きる意志とエネルギーを獲得したのだが、それだからといって悲しみが消えたわけではない。何かの拍子に、洋二郎が苦しんでいた頃のことや自死を選ぶほど追いつめられていた最後の日々のこと

などを、ふつと思ひ出すと、目まいがしそうなほどの喪失感や虚無感に襲われて、涙を抑えられなくなる。その悲しみの感情の激しさに、自分でも驚くのだが、それだからといって、私が生きられなくなっているわけではない。グリーンフワークとは、消すことのできない悲しみや辛さをかかえながらも、生きようとする意志がしっかりと自分をコントロールできるようにする作業なのだと思う。」

そして、「そのところはしっかりと理解しておかなければならない点である。」と念を押した。

人はグリーンフワークによつて「生きる意志とエネルギーを獲得」しても、なお「悲しみや辛さをかかえ」ている。グリーンフワークが終つても、悲しみが消え去ることはない。いや、グリーンフワークが終つたと考えるのが、まちがいのだろう。グリーンフワークが大きな山を越えたということか。別のところで、柳田はこう言っている。「喪失体験者のグリーンフワークというものはどこかで終わるものではなく、生涯続くものだと思う。」

悲しみは多種多様であつて、もちろん消し去りたいものもある。はじめを受けた、失恋をした、親友に裏切られた、あるいは、火事や台風で家をなくしたとか……。しかし、死別の悲しみというものは、愛する人を決して忘れたくない、いつもまでも覚えていたい、思い出してあげたいといった種類のものであろう。悲しみがいつまでたつても消えないのは、なにも嘆くようなことではあるまい。

悲しみが今後も続くとしても、今は「生きようとする意志がしっか

りと自分をコントロールできるように」なっている。グリーンフワークは終わらなくても、その「大事な到達点」にきたことは確かだろう。

三、なぜ「犠牲」を書いたのか

(1) 『犠牲 わが息子・脳死の11日』

柳田のグリーンフワークの中で、最も重い意味を持ったのは「犠牲」を書くことであった。「自己グリーンフワークの条件」⑥のあと、こう続けている。

「予想もしなかった出来事に遭遇して頭のなかが様々な思いで渾沌としてしまい、葛藤が渦をまいてるとき、手紙であれ手記であれ、文章で表現するということは、無数の星のなかの主なものをつないで星座の物語をつくるのに似て、渾沌を整理して一筋の物語につなぐ作業ととらえることができる。そして人は、自分の内面にあるものを物語として抽出できたとき、葛藤から解放されることが多い。」

まず、この本ができあがるまでの事情を見ておくことにする。

洋二郎が亡くなった翌年、明けてまもなく「文藝春秋」編集長が柳田宅を訪れた。一〇〇〇号記念号の企画を相談するためだが、帰りに、柳田は突然切り出した。「息子のためにその追悼記を書いてやりたいのです」と。そして、息子が亡くなるまでの十一日間のことを話した。

記念号の締切まで一カ月半しかなかったが、「納得のいくかたちで、書きたいだけ書いてください」という言葉をもらった。この追悼記は

『文藝春秋』九四年四月号と五月号にわけて掲載される。多くの友人、知人、読者から共感、慰め、励ましの手紙をもらった。しかし、柳田は「いまひとつすっきりしないものが心のなかに残っていた。」

「息子の死に至るまでの深い悩みや日記に書き遺したことや、それから家庭内の事情などについて、当たり障りなくしか書いてなかった。肝心なところがほとんど書けてなかった。」のである。ごく親しい友人も「あれでは一面的だ」、そういう出来事の背景にある青年の悩みや家庭内の葛藤をこそ書くべきではないか、と言ってくれた。

柳田は九五年、単行本にするにあたって、雑誌に書いたものに「プライベートなことを大幅に加筆し」た。できてきた初稿ゲラにもいっぱい赤ペンを入れた。「とにかく書くからにはとことんやらせてくれとわがままをいわせてもらったんです。」と言っている。再校ゲラにも真っ赤になるほど手を入れた。編集者は真っ青になった。もう一回校正があつたら、また赤ペンを入れたにちがいない。柳田も必死だったろう。こうして、単行本「犠牲」はできあがった。

「その結果、…自分の内面に癒しみたいなきができたように思うんですね。しかも、癒しと同時に生きるという意欲のようなものが湧いてきた。」

その「犠牲」はどういう目的で書かれたのか。柳田はこう書いている。

「この一人の若者のプライベートな出来事を、なぜ書こうとするのか。その回答は、これから書く文章全体のなかにあるとしかいいようがない。」

いのだが、あえて簡潔にいうなら、彼の究極の恐怖心を取り除いてやるためだといおうか。」

父邦男は、今、一冊の本を、息子の「究極の恐怖心を取り除いてやるため」に書こうとする。本書のテーマが洋二郎の「魂の救済」とも言われるのはこのゆえである。彼が抱いていた「究極の恐怖」とは、「人間の生存の根源にかかわること、一人の人間が死ぬと、その人がこの世に生き苦しんだということすら、人々から忘れ去られ、歴史から抹消されてしまうという、絶対的な孤独」のことである。これについてはあとでも触れる。

(2) 〆物語るVということ

柳田は洋二郎の追悼記を書くことよって、「癒し」が可能になった。「癒し」だけでなく、「生きる意欲」も湧いてきた。これが、あとに出てくる「再生」ということだろう。〆書くことV、〆物語ることVについて考えてみる。

〆物語るVことの重要性を、柳田は、臨床心理学者河合隼雄から教わった。「私はものの見方や発想の仕方、どれほど河合先生の著作に影響を受けたかわからない。」と、河合に絶大な信頼をおいている。

その河合は言っている。

「人間の心はわからないところがある。つまり物語らないとわからないところがある、と私は思うのです。たとえば途方もない事故が起こった。なぜこんな事故が起こったのか。そのときに自然科学的な説

明は非常に簡単です。なぜ私の恋人が死んだのかというときに、自然科学は完全に説明ができます。「あれは頭蓋骨の損傷ですね」とか何とかいって、それで終わりになる。しかしその人はそんなことではなくて、私の恋人がなぜ私の目の前で死んだのか、それを聞きたいのです。それに対しては物語をつくるより仕方がない。つまり腹におさまるようにならうか。」

なぜ私の恋人が死んだのか？ 頭蓋骨の損傷、そんな医学的な説明だけでは恋人は満足できない。愛する人の死を納得し、受け容れるには、河合も言うように、「腹におさまるようにならうか」にかかっている。「受容への物語」をつくらねばならないのである。ガンのターミナルケアの場合なら、「何日、何か月というゆるやかな『時間』の経過のなかで、家族はそれぞれに物語をつくり、現実を受け入れていく。『彼はこういう運命を背負って生きてきたんだ』といった物語を。」そうして家族は納得する。「納得できる物語とは、その家族の人生歴の延長線でしかつくりえない」。個人レベルなら、「自分の人生の文脈」の中で、ということになるだろう。

柳田は「犠牲」を書く前、洋二郎の死の翌月の九月半ばだが、ごく親しい人に、レポート用紙十枚くらいの、事実報告を兼ねた長いあいさつ状を出している。そのことで、やや気持ちがあ上向きになった。柳田は「最初の転機」と呼んでいるほどである。司馬遼太郎はその返事、悔やみ状の中で、吉田松陰の言葉を紹介した。松陰は二十九歳で亡くなる前、「人は、たとえ六十、七十であろうと、二十五、六であ

ろうと、春夏秋冬というものがあるのだ。悔ゆることはない」と言ったのである。△どんな人生にも春夏秋冬がある▽、あるいは△起承転結▽がある。柳田はこれにはどんなに励まされたことだろう。

身近な人の死を受け容れるには物語をつくらねばならない。これは何も新しい考えではないし、難しい理論でもない。多くの人がすでに実践し、経験済みである。柳田自身講演「体験と物語」の中で話している。それによれば、日本では七十年代半ばから、闘病記がたくさん書かれるようになった。中でもガンの闘病記が多い。患者本人が書くものもあれば、患者の死後、配偶者や家族が書くものもある。なぜこんなにも闘病記が書かれるのか。柳田はその理由として次の四つを挙げた。

①書かなくてはられないような抑えがたい情動に突き動かされて書く。

②自分の生の証しのために書く。

③自分の癒しのために書く。

④癒しだけではなく、一歩進んで自らの再生のために書く。

柳田が「犠牲」を書いた理由は、①、②、③、④のいずれもということになる。ただし、②は柳田本人というより、息子洋二郎の生の証しのためであるが。

「再生」について付言しておく。再生とは、新しい自分の人生を拓くということだが、書くことによって、新しい自己イメージを作り、それを自ら確認し、自分の中に定着させていく。また、書きながら、自

分の新しい社会的役割を、生きるよすがを見出ししていく。そういう形で、書くことが「再生」につながるのである。

(3) 「犠牲」というタイトル

タイトルにも触れておかねばなるまい。「犠牲」とは強烈な題である。それにはサクリファイイスというルビがふられている。いったい何のことだろう。これがわからなければ、本書のテーマもわからないちがいない。

洋二郎が入院して三日目のことであつた。担当の富岡医師の一言から、「いまのうちに骨髄移植はできないだろうか」という考えが、柳田の頭の中を駆けめぐつた。それにはこういう事情があつた。

洋二郎は対人緊張・対人恐怖が強く、せつかく入学した大学を続けられず、社会に出て働ける見通しも立たなかつた。「誰の役にも立たず、誰からも必要とされない存在」となっていることを深く悩んでいた。なんとかその壁を破ろうと、精神科医の助言もあつて、四年前、重症心身障害児の施設でボランティア活動を始めた。「過度の緊張から毎日吐きながらも」、必死になって通ひ続けた。しかし、四カ月ほどたったところで、ついに行くことができなくなつた。

その後は、せいぜい大学時代の友人に誘われて、日曜ごとに教会に出かけるくらいだった。洋二郎はクリスチャンではなかつたが、友達を求めて通つたのである。

そういう経過の中、一年余り前、洋二郎は父から骨髄バンクが活動

を始めたことを聞く。柳田は骨髄移植を推進する運動を支援していたのである。洋二郎は日赤血液センターに出かけ、骨髄ドナーの登録をした。骨髄を抜き取る時、何日か痛みが残ることが多く、一万人に一人くらいの割合で麻酔事故が起こる可能性もある。洋二郎は「そのリスクを喜んで背負いたい」と言って登録したのである。

洋二郎がそういう決断に至るのには思想的な背景があった。旧ソ連亡命映画作家タルコフスキの「サクリファイス（犠牲）」である。洋二郎は映画を見て深く感動した。この映画は「われわれが一日一日を平穩に過ごしていられるのは、この広い空の下のごくどこかで名も知れぬ人間が密かに自己犠牲を捧げているからではないかという信仰的思想」を表現する。内容は、「精神病の主人公アレクサンデルが人類を核戦争の危機から救うために、自分の家に火を放つて神への『捧げ物』とし、自らは精神病院に収容される」という難解なものである。そのラストシーンでは、洋二郎も好んで聴いたバッハ「マタイ受難曲」のアリア「憐れみ給え、わが神よ」が流れる。ここでの「犠牲」は、ほぼ「生贄」と同義であろう。洋二郎は、この「名も知れぬ人間の密かな自己犠牲」に心惹かれて、骨髄ドナーになる登録をしたのである。

柳田は「洋二郎がこの世に生きた証しを、なんとか実践してやれないものか、という思いが胸にこみ上げてきた。」四日目、無理とは思いつつ、脳死患者でも骨髄提供が可能なのか、医者に尋ねてみた。「調べてみます」という返事であった。

五日目、富岡医師より、もし骨髄提供ができないときには、腎臓の

提供という道もありますが、いかがでしょう、という提案があった。

柳田は妻と長男に相談する。妻はこの日初めて病院を訪れ、わが子に対面した。賢一郎は「洋二郎は何かのかたちで人の役に立ちたいと願っていたのだから、骨髄提供が駄目となったら、可哀そうだ。それに代るものとして腎提供をすれば、洋二郎も満足するんじゃないか。」と言う。柳田も妻もこれに賛同する。

洋二郎は亡くなる前年の暮れに、一冊の本を自費出版していた。できあがった時、父に「これでもう死んでもいい」とつぶやくように言った。この本「迷宮の孤独」は二部からなり、第一部は十二編の短篇「洋二郎のダース」、第二部は長文の告白記「ぼく自身のための広告」であった。

この告白記の中で、映画「サクリファイス（犠牲）」を詳しく論じている。柳田は何度も読み返す。そこには「願わくは『自己犠牲』の機会をまつ。」という言葉さえ見られる。柳田は、洋二郎は腎移植に納得してくれるに違いないという確信を持つことができた。

結局、骨髄提供は不可能で、腎移植が行なわれる運びになった。一日目、洋二郎の心臓は停止し、死亡確認後、二つの腎臓は摘出された。柳田と賢一郎は、遺体とともに帰宅した。夜の十一時頃であった。賢一郎がテレビのスイッチを入れた。すると、何たる偶然だろう！ NHKの衛星放送で映画「サクリファイス（犠牲）」が放映されていた。映画は今まさに終わろうとしていた。「マタイ受難曲」のアリア「憐れみ給え、わが神よ」が部屋一杯に流れたのである。柳田は

「立ちすくんだ」。洋二郎の願い、「自己犠牲」がかなえられたのだ！
 という思いだろうか。信仰を持たない柳田もこの時はやはり、「神が
 洋二郎に憐れみをかけ給うてほしいと心底から祈る気持ちになった。」
 と書いている。

四、「二人称の死」の視点

「犠牲」を書く第一の目的は洋二郎の追悼であるが、もう一つ重要な
 ことがあった。柳田は九四年、「文藝春秋」編集長にこう言っていた。
 「それに脳死の息子を十一日間見つめていて、いのちとか死について、
 私なりに気づいたことがいろいろあって、それを世の中の人々に伝え
 たいという気持ちもあるんです。」中でも、△「二人称の死」の視点▽の
 重要性を述べることであった。

「一人称の死」の視点から見ると、多くのことがこれまでとは違った
 形で見えてくる。初めてわかったことも少なくない。特に「いのち」
 がそうなのである。「犠牲」に収められた論文「脳死・二人称の死」
 の視点を「は、手記のいわば必要不可欠な注釈ということになるのだ
 ろうか。柳田はその後、「二人称の死」の視点、「精神的いのち」、「た
 ましい」についてくりかえし述べていく。

(1) 息子のベッドサイドで

それでは、柳田は脳死の息子を見つめ続けて、どういうことに気づ
 いたのか。

柳田はベッドサイドで、洋二郎の手を握り、足をなで、額に、頬
 に、胸に手をあてる。耳許で「洋二郎！」と何度も声をかける。手を
 握りながら、水泳のこと、映画のこと、小説のことなど、想い出すま
 まに語りかける。「迷宮の孤独」を、大学ノート十冊にも上る日記を必
 死になって読み続ける。柳田は父として、また母代わりとして、洋二
 郎を見守るのである。筆者の印象に残った箇所をいくつか挙げる。

・三日目

（この日、柳田は医師に骨髄移植を申し出る。賢一郎は言った）
 「毎日ずっと洋二郎の側に付き添っていると、脳の機能が低下してい
 るといっても、体が話かけてくるんだなあ。全身でね」

賢一郎もそう感じていたのかと、私はうれしい気になった。
 「はくもそう感じるよ。言葉はしゃべらなくても、体が会話してくれ
 る。不思議な気持だね」。

・四日目

（看護婦が）

「聴覚だけは最後まで生きていますといえます。たくさん声をかけてあ
 げて下さいね」といってくれた。

うれしいことをいってくれるのだと感動した。

（書庫には、脳死と臓器移植に関する本が数十冊はある。柳田は執筆
 の必要からこれらを買って求め、目を通してきた。）

しかし、いま、確実に脳死状態に陥っていく息子に対し、何をして
 やれるのかと考えるとき、そうした脳死論の書物は、ほとんど役に立

たないことに気づいた。

なぜなら、いま自分が何をなすべきかは、息子の人生と私たち家族の歴史の文脈のなかでしか解答を得られない、極めて個別的な問題であるからだ。た。

「脳死を他者の死一般の問題として論じる場合には、情緒を抜きにした純粹に科学的・客観的な議論も可能だろうが、己れの死あるいは肉親の死という次元で対処の仕方を考えなければならなくなったとき、主観や情緒は抜き差しならないものとなってくる。」

・六日目

(この日、洋二郎は脳死と判定される。)

私と賢一郎がそれぞれに洋二郎にあれこれ言葉をかけると、洋二郎は脳死状態に入っているのに、いままでと同じように体で答えてくれる。それは、まったく不思議な経験だった。おそらく喜びや悲しみを共有してきた家族でなければわからない感覚だろう。科学的に脳死の人にはもはや感覚も意識もない死者なのだと言明されても、精神的ないのちを共有し合ってきた家族にとっては、脳死に陥った愛する者の肉体は、そんな単純なものではないのだということ、私は強烈に感じただった。

・九日目

(柳田が集中治療室に入り、洋二郎の血圧も、心拍数も高くなっていくのを不思議に思っていると、看護婦が入ってきた。)

「あら、お父さんが来たら、急に上がったわ。さっきまで血圧は百二

十台、心拍数は五十台だったのに」

「ほんとですか。まるで健康なときに戻ったみたいだ。昨日から昇圧剤の点滴をやめたのに、どうしたんだろう。ほくが来たのを、からだが感知するのかなあ」

「ほんとにそんな感じがしますね」

「からだが語りかけてくるという、肉親でなければわからない感覚が、また生じた。」

「洋二郎、おやじが来たぞ」

私は彼の耳許で声をかけた。

柳田は息子のベッドサイドで考えた。今、息子に何をしようか、と。その答えは、息子を含む「家族の歴史の文脈」の中でしか得られない。これは「極めて個別的な問題」である。「他者の死一般」なら「科学的・客観的な議論」は可能だろう。「己れの死あるいは肉親の死という次元」では、「主観や情緒」が重要なものとしてかかわってくる。ここから、人称による死の相違という問題が生じる。

柳田は、脳死状態に陥った洋二郎を「もはや感覚も意識もない死者」とは受け取れない。兄の賢一郎もそうである。「精神的ないのち」を共有してきた家族には、死者とは受け取れないのである。言葉をかけると洋二郎のからだは、今までと同じように答えてくれる。喜びや悲しみを共有してきた家族には、それがわかるのである。ここに、その「精神的ないのち」とは何なのかという問題が生まれる。

(2) 「二人称の死」

「洋二郎の死後間もない九三年の暮れ、柳田は「日本未熟児新生児学会」から講演の依頼を受けた。柳田は新生児の「生と死」については、まだ視野に入っていなかったが、いのちや死の問題を、突っ込んで勉強をしなければならぬと思っていた折りだったので引き受けた。テーマは「いのちを考える」とし、生まれた子を喪った親のグリーフワークのあり方を考えているうちに、「二人称の死」という視点の重要性に気がついた。人間の「死の人称性」は、フランスの哲学者ジャン・ケレヴィッチが著書「死」の中で提起した概念である。

われわれは人の死を考える時、ともすれば自分の死も他人の死もいっしょくたにしている。しかし、死には「一人称の死」、「二人称の死」、「三人称の死」があり、それぞれに全く異質なのである。

「一人称の死」とは私の死である。ここで重要なのは、その人の死生観、リビング・ウィル、自己決定権などである。自分はどうのように死にたいのか。もし脳死に陥ったら、臓器を提供するのかわからないのか。もし植物状態になったら、あるいはガンの末期には、あくまで延命治療を望むのかどうか。そういう選択が重要となる。

「二人称の死」とはあなたの死である。配偶者、親子、兄弟姉妹、恋人の死、つまり、自分にとって密接な関係のある人、人生を分かち合うほど大事な関係性のある人の死である。この場合、「自分のなかの何かが死んでいく」といった深い喪失感がある。この死に直面した者は、二つのことをなさねばならない。一つは、死にゆく人をどうケア

するのかという大きな任務。もう一つは、喪失体験からどう生き直すかという難しい問題である。

「三人称の死」とは、彼、彼女、ヒト一般の死、他人の死である。われわれは第三者の立場に立って、その死を冷静に眺めることができる。たとえば、交通事故で若者が何人亡くなるかと、アフリカで何万人が餓死しようと、悲しみのあまり夜も眠れないというようなことはない。ある程度つき合いのある親戚、友人でも、その死はかなり対象化することができる。

人称によって、死のもつ意味はこれほどまでに違ってくる。その違いは、「知識レヴェル」と「実感レヴェル」（あるいは「魂レヴェル」という区別でも語られる。「痛切に感じたのは、脳死という、目で見えた範囲ではとらえにくい死へのプロセスについて、医学的な知識レヴェルで対象化して理解することと、人生を共有し合った者の実感レヴェルでわかることの間には、決定的な違いがあるということだった。」^⑧）

「二人称の死」に関しては、われわれは「魂レヴェル」で理解しようとする。柳田は「二人称の死」を経験するのは初めてではない。戦後間もない昭和二十一年、小学生の時、兄と父を相次いで亡くしている。平成元年には母親を八十四歳で亡くしている。しかし、息子洋二郎の死は同じ「二人称の死」でも、前者よりはるかに鋭い形で現われてくる。

この「二人称の死」の視点の発見は、柳田を「いのち」につい

てのより深い思索へと向かわせる。

(3) 「精神的いのち」

救命センターで意識のない洋二郎を見つめていて、柳田が気づいたもう一つ重要なことは、人間のいのちのもつ精神性の側面であった。

「人間のいのちには、生物学的な一つの生体としてのいのちの側面と、人間が喜んだり悲しんだり、悩んだり意欲を燃やしたりする精神的なのちの側面の二つの面があるんですね。…ところが現代医学では、精神的なのちの側面が無視されがちなのです。」⁵⁰

人間の「いのち」には、「生物学的いのち」と「精神的いのち」の二つの側面がある。前者は酸素、水、食物を摂取して、生体機能を維持しており、後者は精神生活、社会生活、信仰生活を営んでいる。われわれは生活をともにしてきた配偶者、親子、兄弟姉妹、恋人とは「精神的いのち」を共有している。

現代の医学は「治す」ことを主眼とし、「いのち」を「生物学的いのち」の側面でのみとらえ、「精神的いのち」については視野の外に追いやる傾向がある。careはほとんど「生物学的いのち」を対象とし、careは「生物学的いのち」と「精神的いのち」の両者を対象とする。いのちが二つに分かれているわけではない。患者の立場に立ってみれば、「生物学的いのちも精神的いのちも渾然一体となって病んでいる人間としての自分がある」のである。

柳田は「その精神性の核にあるのが大和魂のような意味ではなく人

間が個性として持っている『魂』ではないかと僕は思うんです。」⁵¹と云う。「たましい」についての考え方は、あとで詳しく述べるが、ここで、柳田と宗教の關係に触れておこう。

柳田は特定の宗教を信じてはいない。仏教の「色即是空」の考えに共鳴し、原始神道的な考えにも共感するものがある。「私の人生観は仏教的だが、とくに仏教を信仰しているわけではない。」⁵²「ざりとて、無宗教でもない。…何か凄く怖い大きな存在がどこかにあるという感じは持っているんです。」「自分だけの宗教は持っているかもしれない。生意気ですね。でも世間的な意味では、宗教には行かないと思います。」⁵³と言っている。

では、洋二郎の葬儀、墓はどうしたのか。柳田は通常の葬式ではなく、「ごく内々に」「無宗教のお別れの会」を行った。洋二郎が無宗教だったし、形式的な葬式を嫌っていたからである。会には、柳田の兄弟、洋二郎の親しかった友人ら、二十数名が集まった。

お墓は、最初の命日に、家からほど近い多摩丘陵の一角に拓かれた墓苑に建てた。墓石には、柳田の筆による「いのち 永遠にして」の文字が刻まれた。この言葉はまた「犠牲」の巻頭にも掲げられている。

五、「死後の物語」

柳田は「犠牲」の最終章で、こう書く。

「歳月が流れ、いま私の心のなかに静かに、しかし、しっかりと根を

下ろしている言葉がある。／＼ *Indestructibility* (破壊し得ないこと)」

宗教学者エリアーアが著書の中で使った概念である。彼は不幸な自然科学者の言葉として記している。「自分は病いに苦しんで、もう長く生きないかもしれないけれども、この世に生きて苦しんでいたということは誰も否定できない。それをなかつたことにはできないと自分は思った」。それは、人間の存在の「破壊し得ないこと」というものである、と。

洋二郎は大江健三郎の作品を通してこれを知り、「自分の生への支え」にしようとしていた。すでに見たように、洋二郎は「一人の人間が死ぬと、その人がこの世に生き苦しんだということすら、人々から忘れ去られ、歴史から抹消されてしまうという、絶対的な孤独」をこそ最も怖れていたからである。

柳田は「犠牲」の終わりで、洋二郎は自らの「再生」を見ることなく逝ったが、「洋二郎がこの世に生きたという事実、存在したという事実の破壊し得ないこと」を確認する役割を自分が代わって担うことを誓う。ここで、「たましい」が重要な意味をもって現れてくる。

(1) 「たましい」

「たましい」は、「精神活動の核ともいうべきもの」である。その「たましい」に関して、柳田は、伊東静雄の詩をめぐって展開される大江健三郎の短篇「火をめぐらす鳥」に共感を示す。伊東の詩「鶯（一老

人の詩）」は、こういう一節で始まる。

(私の魂) といふことは言へない

その証拠を私は君に語らう

小説では、大江はこの詩の新しい解釈に出会い、それを全面的に受け容れるのだが、柳田はこの解釈から重大なひらめきを得る。

「たましいは目で見ることはできない。たましいは楽器のようなもので、それ自体はふだんは音を出さず胸の奥で眠ったような状態にあるけれど、外から訪れたものによって刺激を受けると、美しい音が出て、このたましいは美しい色だとか悲しい色だと周りの人々も記憶するし、奏でたましい自身も記憶する。音を奏でたとき、秘められた生い立ち、人生が凝縮されて表現されてくるということです。」

「たましい」は楽器のようなものである。それ自体では音を出さない。外からの働きかけがなければ、これが「私の魂」といふことは言へない。演奏する人があつて初めて、美しい音色を奏するのである。その音色は、聞いた人ばかりでなく、「たましい」自身も記憶することができる。こうして奏でられた音の中には、その人の「秘められた生い立ち、人生が凝縮されて」表れ出てくるのである。

「犠牲」が書かれた動機を、「たましい」という言葉を使ってこう言い換えることができる。柳田は洋二郎の「たましい」がどんな形、どんな色をしていたのか、それを確かめたかった。柳田は洋二郎の日記、

本、ビデオをたどりながら洋二郎の「たましい」に語りかける。そうすれば、息子の「たましい」はきつと自身の調べを、「秘められた人生」を奏でるに違いない、と。亡くなった人の「魂の救済」とは、思うに、「たましい」と対話をくりかえし、生きている間ついに表に出ることのなかった可能性をも含めて、「たましい」の持つ可能性を全面的に花開かせてやることではないだろうか。

柳田は「たましい」が死後にも存続することを信じる。「精神的ないのち」というのは、その人固有の生物学的な命が絶えても生きつづけるし、どこに生きつづけるかという、その人と関係性を持った人のなかで生きつづける。とくに、親子兄弟姉妹とか連れ合いとか、そういう人生を共有した人のなかに生きつづける。」^④

(2) 亡くなった人は今

「犠牲」の出版は大きな反響を呼んだ。読者からはこれまでになくたくさんの手紙が寄せられた。特に、心を病む人々、家族の誰かを喪った人々から、共感を持って読んだという内容のものが多かった。それらは、自らの苦難の人生が「犠牲」に重ね合わされて綴られていた。そういう事情を踏まえて、柳田は「犠牲」への手紙「はじめに」の中で、こう書いている。

「『犠牲』を出したとき、私は洋二郎の死についてそれ以上のことは言えまいと思っていた。息子の死への悲嘆にいつまでもしがみつくな表現活動を続けたくなかったからだ。しかし、右のような状況が生

じたことは、私の表現活動に若干の変更を迫ることになった。つまり、「犠牲」によって完結させようと思った洋二郎の「生と死」の物語が、多くの読者によって「共有する終わらない過去」として社会的存在となり、その輪のなかに私も引きずりこまれることになったのだ。洋二郎の「生と死」や私自身の心の旅について、もう少し語り続けなければならなかったのである。」^⑤

洋二郎の「生と死」の物語」は、その続編を、「死後の物語」(正統あわせて「死生観」となる)を要求している。「犠牲」によって、柳田は洋二郎の死を納得し、受け容れようとしたが、物語はそこで終わらなかつたのである。洋二郎は今どうしているのか。洋二郎の「たましい」の物語が始まる。柳田がどういう答えを出すのか。同様の経験をもつ多くの読者は固唾を飲んで見つめているだろう。柳田はもうそこから逃れられない。「犠牲」への手紙」の文庫版解説者辺見じゅんも言うように、ここで柳田は「新しい物語」を語ろうとしている。洋二郎の「たましいの物語」、つまり彼の「死後の物語」である。

「たましい」は、生物学的な命の死後も、「人生を共有した人のなかに生きつづける」と言う。そればかりではない。「犠牲」は多くの若者をも感動させた。彼らの中には柳田に手紙を書いた者、読書感想文としてまとめた者もある。洋二郎の「たましい」は、「犠牲」に感動した読者の心の中でも生きている。別のところでは、「精神的ないのち、あるいはたましいは人の心の中で、あるいは木や石や風のなかで、生きつづけると信じてます。その意味でいのは永遠だと思えます。」^⑥

言う。「たましい」が生きているのは「心の中」だけではなさそうだ。

(3) 「死後の物語」

「犠牲」の装幀には伊勢美子「宮沢賢治どうわえほん」⁸ よだかの星」所収の絵が使われている。もちろん柳田の希望によってである。伊勢は「天に美しく輝くよだかの星の絵」をカバーに、「ひたすら天を目指すよだかの絵」を扉に選んだ。柳田の胸には、洋二郎は「よだか」ではなかったかという思いが潜んでいる。柳田によれば、この童話は、孤独なよだかをメタファーとする悲しい「人間疎外」の物語である。醜いよだかは地上では他の鳥たちから馬鹿にされ、いじめられ、ついに弟のかわせみにも別れを告げ、ひたすら太陽を目指し、空高く飛んでいく。太陽に焼かれれば、小さな光を出せると思っただからである。しかし、よだかは太陽に相手にされず、他の星々にも受け入れてもらえない。天にも地にも生きる場所を見出せなかった。よだかは絶望して、どこまでもまっすぐ空へ昇っていく。寒さや霜のため、意識がなくなつて最期を迎える。伊勢の、よだかが大地に別れを告げて飛び立つ絵は、よだかの「孤絶した魂の色を表現し切った」。よだかが天を目指す絵は、「雄々しくも哀切に満ちている。」と柳田は書いている。

ご存じのように、宮沢の童話はよだかの死をもって終わってはいない。よだかは燐の火のような青い美しい光になって、しずかに燃えるのである。「そしてよだかの星は燃えつづけました。いつまでもいつ

までも燃えつづけました。／今でもまだ燃えています。」⁹洋二郎にも、こういう「死後の物語」が必要なのである。

一九九八年十一月、筆者は神戸で柳田邦男の講演「悲しみを糧に生きる」を聞いた。柳田は、いま関心のあることとして、「死後世界」と「神話」、それに「たましい」を挙げた。前者に関しては、キューブラー・ロスと河合隼雄の書いたものに興味をもっている。「死後世界」があるかないかは、科学的に証明することはできないし、する必要もない。それを本人がどう考えるか、どう大事にしているのが重要である。人は「死後世界」の存在を、それぞれの「人生という文脈」の中で考えている。自分自身がその存在を納得できるかどうかにかかっているのである。

そういつたことを述べたあと、先日、河合隼雄さんと会った時に、大変いい詩を教わった。その詩を皆さん方にも紹介したい、と話した。柳田は自ら用意したスライド、七、八場面だったろうか、を見せながら、時間をかけてゆっくりこの詩を朗読した。「どうですーいい詩でしょう」という感じだった。「あとに残された人へ 10000の風」という、アメリカで誕生した作者不詳の詩である。

私の墓石の前に立って 涙を流さないでください。

私はそこにはいません。

眠ってなんかいません。

私は10000の風になって 吹きぬけています。

私はダイヤモンドのように 雪の上で輝いています。

私は陽の光になって 熟した穀物にふりそそいでいます。

秋には やさしい雨になります。

朝の静けさのなかで あなたが目ざめるとき

私はすばやい流れとなつて 駆けあがり

鳥たちを 空でくるくる舞わせています。

夜は星になり、

私は、そつと光っています。

どうか、その墓石の前で 泣かないでください。

私はそこにはいません。

私は死んでないのです。^⑥

柳田は、この詩にはキリスト教の匂いが無い。キリスト教が入ってくる以前の「原始的な」感性で歌われている。だから日本人も素直に共感できるのではないか、といったようなことを話した。最近になつても、「私はこの詩に強烈なリアリティを感じるのだ。」と書いている。われわれ日本人にもつとびつたりした「死後の物語」あるいは「死後世界」を創り出すことは、今後の柳田の最も重要な仕事の一つだろう。そして、それは死の日まで続く柳田のグリーンフワークでもあるだろう。

おわりに

去る六月八日（金）、大阪教育大学付属池田小学校で乱入殺傷事件が起こった。昼過ぎ、研究室のインターネットで知るや、足元が震えてきた。とんでもないことが起こった。初め小学生三人死亡と流れた。それが八人になった。午後の講義前であったが、激しく動揺していた。あの動揺は何だったのだろうか。

拙論の大要は春にできていた。グリーンフワークにおける「物語る」ことの重要性、これが結論になるはずであった。物語を作ることによつて、徐々に、愛する人の死を納得し、受け容れていく。しかし、わずか六、七年という短い生涯に「物語」は可能なのか。そこに八春夏秋冬を見出すことができるのか。絶望的なものを直感してこそその激しい動揺だったのではないだろうか。

遺族となったある両親は、強い希望で、事件から五日後、校舎に入り、わが娘が殺害された現場を目に焼きつけようとした。筆者はそのニュースに深い感銘を受けた。他の遺族も、当初「最善を尽くした」としか言わなかつた学校側に、徹底した事実の解明を求めていった。校舎の全面建て替えにも反対した。当日、容疑者侵入後、各教員、職員はどういう対応をしたのか。わが子はどのように死んでいったのか。遺族の最も知りたところだろう。遺族たちが校舎の建て替えに反対し、あくまで事実を明らかにすることを求めるのも、教職員を厳しく責めるよりも、これからわが子の「生と死の物語」をつくりあげていくのに（今、そう意識してはいないだろうが）、何よりもたくさ

んの情報が必要だったからだと思ふ。この理不尽な現実を、遺族もいずれば受け容れざるをえないと、直感しているからだろう。

こんなに短い生涯に八起承転結を見出すことは、筆者の想像を超えて、あるいは可能なかもしれないが、もしそれが困難ならば、遺族にとっては、それだけ「死後の物語」が重要度を増すことになるだろう。しかし、悲しいかな、今の日本には、「われわれの死生観」と呼べるものはないのである。

参考文献

- 〔犠牲〕わが息子・脳死の11日 文藝春秋、一九九五年七月
 〔死の医学〕への日記 新潮社、一九九六年七月
 〔いのち 8人の医師との対話〕(対談集) 講談社、一九九六年十月
 〔現代日本文化論6 死の変容〕(共著) 岩波書店、一九九七年一月
 〔人間の事実〕文藝春秋、一九九七年二月
 〔人間が生きる条件〕(共著) 岩波書店、一九九七年一月
 〔見えないものを見る〕(共著) 理論社、一九九七年七月
 〔突然の死〕とグリーンフケア (共著) 春秋社、一九九七年十月
 〔20世紀は人間を幸福にしたか〕(対談集) 講談社、一九九八年一月
 〔犠牲〕への手紙 文藝春秋、一九九八年四月
 〔この国の失敗の本質〕講談社、一九九八年十二月
 〔読むことは生きること〕新潮社、一九九九年一月
 〔脳治療革命の朝〕文藝春秋、二〇〇〇年三月
 〔緊急発言 いのちへI〕講談社、二〇〇〇年七月

注

- ① 「突然の死」とグリーンフケア、二頁
- ② 前掲書、二―三頁
- ③ 前掲書、一頁
- ④ 前掲書、三―四頁
- ⑤ 前掲書、六―九頁
- ⑥ 前掲書、十―十四頁
- ⑦ 前掲書、十九頁
- ⑧ 「犠牲」(文庫版)、二八〇頁
- ⑨ 「犠牲」への手紙、三〇―一頁
- ⑩ 「犠牲」(文庫版)、二五九―二六一頁
- ⑪ 「犠牲」への手紙、一三二―一三四頁
- ⑫ 「犠牲」(文庫版)、二二頁
- ⑬ 「20世紀は人間を幸福にしたか」、十九頁
- ⑭ 「犠牲」(文庫版)、二四〇―二四三頁
- ⑮ 「死の臨床」三五(日本死の臨床研究会、二〇〇〇年)、七頁
- ⑯ 「犠牲」への手紙、一一七―一二四頁
- ⑰ 「犠牲」(文庫版)、五七―五九頁
- ⑱ 前掲書、五九頁
- ⑲ 前掲書、六〇頁
- ⑳ 前掲書、一三二頁
- ㉑ 前掲書、一一八頁
- ㉒ 前掲書、一三七頁
- ㉓ 前掲書、二〇七頁
- ㉔ 前掲書、二六〇―二六一頁
- ㉕ 前掲書、六四頁
- ㉖ 前掲書、六八頁
- ㉗ 前掲書、一一〇―一一一頁
- ㉘ 前掲書、一四一―一四二頁
- ㉙ 前掲書、一八三―一八四頁
- ㉚ 「犠牲」への手紙、七三頁

- ③① 「犠牲」(文庫版)、二七九頁
- ③② 「犠牲」への手紙、一七八頁
- ③③ 「いのち 8人の医師との対話」、三頁
- ③④ 「犠牲」への手紙、二七八頁
- ③⑤ 「突然の死」とグリーフケア、五頁
- ③⑥ 「犠牲」への手紙、一五七、二九二頁
- ③⑦ 「犠牲」(文庫版)、二〇七、二〇八頁
- ③⑧ 前掲書、二一〇頁
- ③⑨ 「犠牲」への手紙、七一〜七二頁
- ④① 前掲書、一五八頁
- ④② 前掲書、二頁
- ④③ 「犠牲」への手紙(文庫版)、三三二頁
- ④④ 「犠牲」への手紙、二九一頁
- ④⑤ 「犠牲」(文庫版)、二七四〜二七五頁
- ④⑥ 宮沢賢治「銀河鉄道の夜」(新潮文庫、一九八九年)、三九頁
- ④⑦ 「あとに残された人へ 一〇〇〇の風」(南風権訳) 三五館、一九九五年
- ④⑧ 「犠牲」への手紙(文庫版)、三三四頁

〔付記〕

本研究は、奈良大学総合研究所より平成十一年度研究助成を受けて行なったものの一部である。助成いただきましたこと、ここにあらためて御礼申し上げます。

平成13年9月7日原稿受理、教養部

Grief work of Kunio YANAGIDA

Isao Omachi